

## 島根県立三瓶自然館の来館者層②

龍 善 暢\*

### Results of the questionnaires for the visitors to the Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe

Yoshinobu Tatsu

#### 1. はじめに

島根県立三瓶自然館は1991年10月に開館し2002年4月、新館を増築してリニューアルオープンした。同館の来館者層については2003年に一度報告している(龍, 2003)。ここでは新館が建設されるまでに実施したアンケート結果を中心に集計し考察を行った。

この度、新館がオープンして約15年が経過したことをふまえ、最近の来館者データを基に分析を行うとともに新たにアンケート調査を実施して現在の利用状況や前回からの変化について検討を行った。

#### 2. 島根県立三瓶自然館の概要

同館は大山隠岐国立公園三瓶山地区の中に建設されており、周囲には自然林や草原、池などの豊かな自然が広がっている。

約2,000㎡の展示室には、三瓶の自然や島根の自然の紹介コーナーの他、約4,000年前の噴火で埋まった埋没スギの巨木も展示されている。また、直径20mのドームスクリーンではプラネタリウムの他、地域の自然を撮した全天周映像も上映している。5階には天文台もあり、100人程度が同時に天体観察を行うことができる。

約6km離れた所に附属施設として三瓶小豆原埋没林公園が整備され、埋没スギを発掘した現地が保存展示されている。

公共交通機関としてはJR大田市駅からバス路線があるが、片道約1時間かかる上、平日3便、土日祝日2便と本数が少なく、利用者はとても少ない。来館に

は車が貸し切りバスを利用することとなる。

隣接して、国立三瓶青少年交流の家があり、小中高校生の宿泊研修などに利用され、三瓶自然館の展示見学や天体観察会をプログラムに組む学校も多い。

#### 3. 2016年度の来館状況

##### (1) 月別来館者数

2016年度の月別来館状況を図1に示す。夏休み期間を中心に7月から9月にかけては毎年企画展を開催しており多くの来館者がある。また、例年5月の連休と盆の行楽シーズンは1日の来館者が千人を超えるなど特に繁忙期となっている。

その反対に冬期は積雪があるため来館者は夏期に比べて大きく減少している。

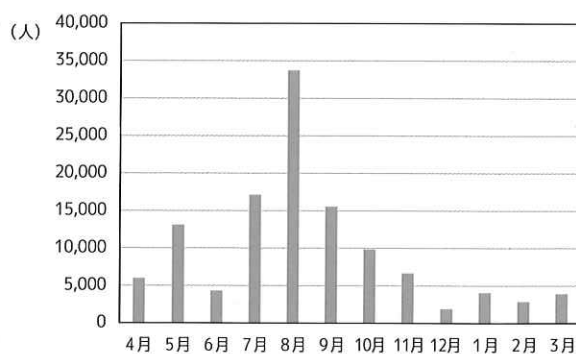


図1 2016年度の月別来館状況

##### (2) 個人と団体

2016年度の大人と小中高校生、個人と団体の状況を図2に示す。発券による数値なので、有料スペース

\* 島根県立三瓶自然館, 〒694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan

入場者のみの集計となっている。

全体に占める団体の比率は31%であるが、小中高校生に絞ってみると約半数が団体となっている。

また、図には示していないがこの中で天体観察会のみについてみると、74%が団体である。隣接の三瓶青少年交流の家を利用して宿泊研修している団体が、夜のメニューに天体観察会を選択しているケースの多さを物語っている。

1998年度から2001年度の調査で団体は40%を超えていた(龍, 2003)。しかし、2016年度には上記のように31%まで減少しており、特に大人の団体の減り幅が大きい。背景には、バス利用料金の高騰などによる団体旅行の減少などが考えられる。

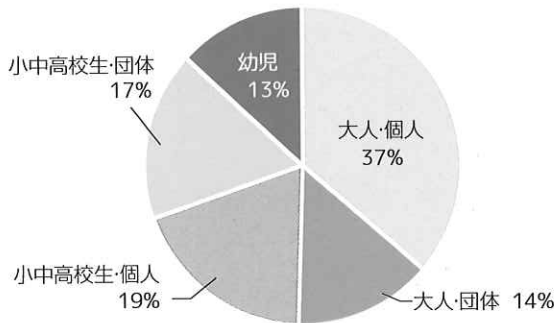


図2 個人と団体の割合

### (3) 学校団体

2013年度から2016年度までの学校団体の来館状況について示したのが図3及び図4である。

例年160校前後が来館している。学校数は島根県が最も多いが、人数で見ると広島県が多い。これは学校の規模による違いである。この2年は広島県の小学校が増えている。これは、広島県において長期宿泊研修に対する助成事業が実施されていたためと考えられるが、この事業は2016年度で終了した。

## 4. 今回実施したアンケート

通常、アンケートコーナーを館内に設置して回収することが多いが、子ども達が記入する率が高く、求める情報に偏りが出る可能性があったので、今回は当館スタッフが来館者から直接聞き取る方式とした。

対象は個人またはグループで来館された大人である。年間を通して実施し、857件の回答を得た。

調査項目は、①居住地はどこか ②誰と来たか ③初めてか再来館か ④情報を何から得ているか などである。

調査日も記録し、通常期と繁忙期(5月の連休と盆期間)を比較できるようにした。

ただし、天体観察会では調査を実施しておらず、データは昼の来館者に限られる。

### (1) 来館者の居住地

来館者の居住地を図5で示す。約1/2が島根県、約1/4が広島県、残り約1/4がそれ以外の都道府県である。これは、繁忙期に実施している車のナンバー調査とよく一致している。

2002年に新館がオープンするまでは県内対県外の比率が約6:4であった。拡充を機に県外客の割合が高くなり、来館者のエリアが広がっていることがわかる。この傾向はここ数年変わっていない。

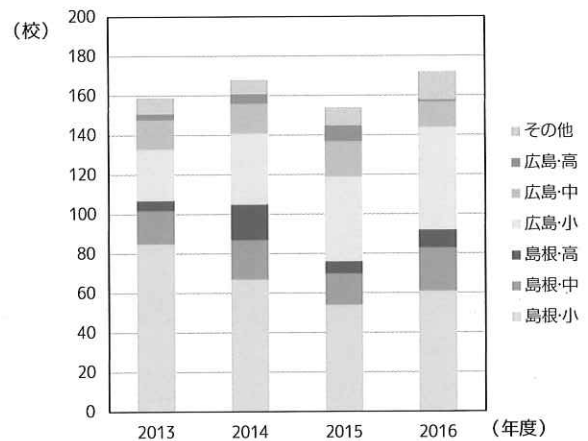


図3 学校団体の来館状況① 校種別来館学校数

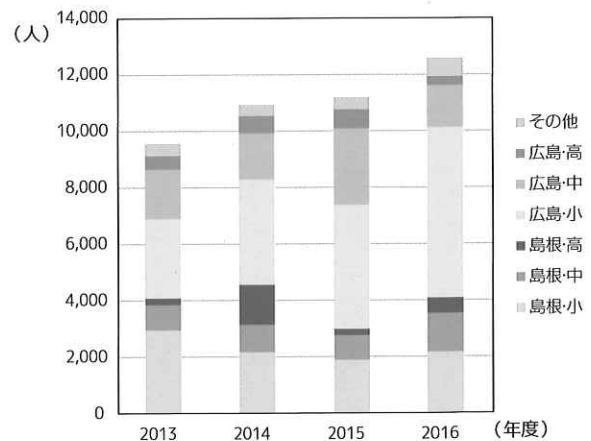


図4 学校団体の来館状況② 校種別来館人数

(2) 誰と来館したか

一人、家族、グループの3つに分けて聞いている。結果は図6である。家族での来館が最も多く64%である。繁忙期に絞ってみるとその率は94%に達した(図7)。

(3) リピート率

初めての来館か再来館かを聞いた結果が図8である。全体では58%がリピーター(以前にも来館したことがある)である。この率は夏の企画展開催時(7~9月)には67%に上がり、夏休みに企画展を楽しみにして

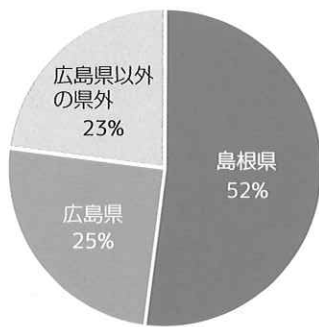


図5 来館者の居住地

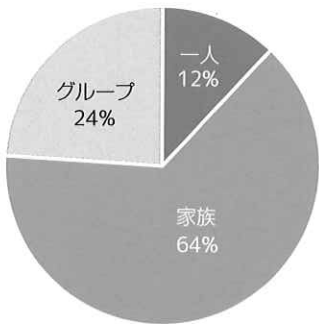


図6 誰と来館したか(通年)

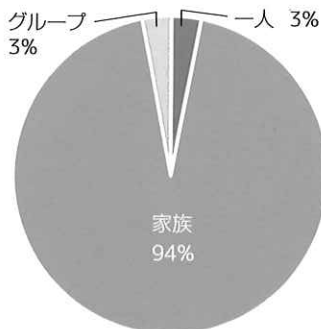


図7 誰と来館したか(繁忙期)

来館される方が多いことを示している。

また、島根県民に絞ると年間を通して77%がリピーターとなっており、地域の施設として親しまれていることも伺える。

(4) 来館者の情報源

来館者が何から三瓶自然館の情報を得ているのかを示すのが図9である。複数回答も含まれるので、合計は100%を超えている。

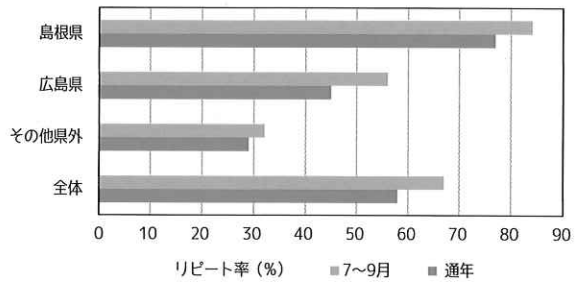


図8 来館者のリピート率

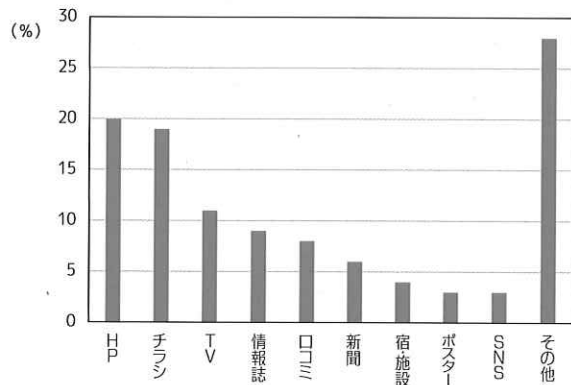


図9 三瓶自然館の情報を何から得たか

これによると、ホームページが最も多く20%である。地域別の利用状況を調べてみると、県内が17%、県外が24%となっており、他の手段からの情報が得にくい県外からの利用率が高い。

ホームページは開館時間やビジュアルドームの上映時刻、イベントなど各種の情報を詳しく知ることができる上、いつでも見ることができる。サヒメルに行こうと思いついてから調べることができるので、利用者にとって重要な情報源となっている。

ツイッターやフェイスブックなどのSNSを利用している人は3%と予想外に少なかった。情報の拡散手法としては有効であるので今後の運用を検討する余地がある。

チラシには夏の企画展開催時に配布している小学生無料招待券も含まれる。この券は毎年夏休み前に鳥根、広島両県の小学生全員に配布しており、2016年度の無料招待券の利用率は約2.4%であった。招待券をもらった小学生は必ず保護者と来館することになるのでとても効果的である。

友人・知人に聞いたという「口コミ」も8%と新聞やポスター以上の割合を占めている。知っている人から直接聞く情報は信用度が高いことの現れでもある。これも県内5%に対して県外11%と他の情報源の少ない県外の率が高くなっている。

「その他」の回答の中で目立ったものは、「以前から知っている」と「地元あるいは地元出身」というものであった。

## 5. ま と め

三瓶自然館は開館して25年を超えており、子どもの頃に来館した方が我が子を連れて来館されていることも珍しくない。鳥根県と広島県における知名度はかなり高いと思われる。リピート率の高さから以前に来館経験のある方も多ことがわかる。

学校団体の利用状況を見ると人数はここ数年増加傾向にある。また利用は、鳥根県と広島県の学校が大半である。両県には毎年オフシーズンに館の職員が学校訪問を行い、利用後の感想を聞いたり、利用方法の提案を行ってきた。その成果が現れていると考えられる。

学校団体を除くと家族単位（親子や3世代）の来館形態が圧倒的に多い。これは、企画展や各種イベント

を親子での来館を想定しながら組み立てている結果であり、また広報もそのような世代を主な対象として行ってきた結果でもある。これまで実施してきたことの成果が現れていると言っても良い。

今後はその他の利用者層をどう開拓していくかが課題となってくる。現在でも、館の落ち着いたたたずまいに惹かれて来館される方や、プラネタリウムの投影のみを目的に来館される大人の方も多。これらのニーズをうまくすくい上げ、ファンの幅を広げていくことが期待されている。

また、来館者層が県外からが約半数であることを見ると、事業や広報を館単独で考えるのではなく、広域的な視点で組み立てることも重要である。三瓶山、石見銀山、出雲大社や松江城などなど、近隣には様々な地域・施設がある。これらと連携をとりつつ多様な利用法を提案していくことも必要となってきた。

## 謝 辞

この度の調査にあたっては、三瓶自然館のスタッフの方々に多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表します。

## 参 考 文 献

龍 善暢（2003）鳥根県立三瓶自然館の来館者層。鳥根県立三瓶自然館研究報告。1, 29-34